

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 5 日現在

機関番号：84413

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370902

研究課題名(和文) 日本列島における出現期の甑の故地に関する基礎的研究

研究課題名(英文) Basic study on the lineage of the incipient steamer in Japanese archipelago

研究代表者

寺井 誠 (Terai, Makoto)

公益財団法人大阪市博物館協会(大阪文化財研究所、大阪歴史博物館、大阪市立美術館、・大阪歴史博物館・主任学芸員)

研究者番号：60344371

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、朝鮮半島の甑の地域性を基に、日本列島の甑の系譜、さらにはそれを齎した渡来人の故地を解明することを目的とし、おもに以下の点を明らかにした。1) 日本列島内で朝鮮半島系甑がもっとも多いのは中河内と和泉北部(陶邑とその周辺)である。2) 甑の系譜で圧倒的に多いのは全羅道など半島南西部のものであるが、集落内では京畿道や慶尚道の系譜のものもあり、多様な出身地の渡来人が共存したことを示す。3) 畿内が全羅道、すなわち百済・馬韓を中心とする地域が多いのに対し、岡山県では慶尚道、すなわち加耶や新羅に系譜が求められる甑が多い。これは畿内以外の地域も独自の対朝鮮半島交渉が可能であったことを示唆する。

研究成果の概要(英文)：The objective of this study was to investigate the lineage of the incipient steamer of the Japanese archipelago, and the native place of the people bringing the steamer, on the base of clarifying the local variation of Korean peninsula. The outcomes are as follows:

1) In Japanese archipelago, the Central Kawachi and the northern Izumi had the most number of the steamers derived from the Korean peninsula.; 2) Though the steamers derived from the southwestern Korea were overwhelmingly more than the other area, some settlement had sometimes the ones from central western and southeastern. That indicates that the people of different native place had live together. ; 3) In the Kinai area the steamers derived from Baekje and Mahan of the southwestern Korea are more than the other area, whereas in the Okayama area the steamers from Silla and Gaya of the southeastern Korea are more. That suggests the areas except the Kinai independently had the negotiation to the Korea.

研究分野：考古学

キーワード：考古学 渡来人 甑

## 1. 研究開始当初の背景

古墳時代の渡来人について語る際、「朝鮮半島」から来た「渡来人」と言われがちである。ただ、三国時代という時代名称があるように、朝鮮半島は単一ではなく、北に高句麗、南に百済、新羅、さらには加耶、馬韓という勢力が分立して存在し、さらにこれらの中でも細かい地域の特徴があったであろう。

考古資料はさまざまな視点から分析することにより、地域や時期の特徴を抽出することが可能である。これを基に日本列島で出土する朝鮮半島系資料について、朝鮮半島のどこなのかということはある程度同定できる場合がある。このように故地を抽出することにより、対半島交渉が特定の地域とのみ行われたのか、もしくは多様な地域との交渉があったのかなど、具体的な対朝鮮半島交渉が明らかになるのである。

また、日本列島内においても各地で朝鮮半島系資料が出土する場合がある。古墳時代であれば、畿内が圧倒的に多いのは確かであるが、地方でも出土することがある。この際、地方が畿内と朝鮮半島系資料の故地の傾向が同じであるなら、畿内を介して伝えられたものであると言えるかもしれないが、故地の傾向が違うなら、地方が独自に対朝鮮半島のパイプを持っていた可能性も考えられる。

本研究で扱うのは5世紀を中心とした時期であるので、おそらく日本列島も朝鮮半島も中央集権国家が完成しておらず、地方の独自性が維持されていたと想定する。それを検証するためにも、日本列島における多様な対朝鮮半島交渉を明らかにすることが有効であり、本研究を始めた背景である。

## 2. 研究の目的

本研究は、朝鮮半島三国時代の甑の地域性を整理することを通じて、日本列島各地で出土した出現期（おおむね古墳時代中期、5世紀頃）の甑の故地を明らかにし、それを基に日本列島各地における対朝鮮半島交渉のあり方、すなわち具体的にどここの地域との交渉が行われていたかということを知解するための基礎的研究である。

甑は、日本列島では古墳時代中期に朝鮮半島からの渡来文化の影響で成立した器種である。弥生時代には鉢の底部に孔を穿った簡易なものがあるものの、古墳時代中期に登場するのは専用のものである。両側に把手を持ち、底部には水蒸気を通すための孔が穿たれていて、下に水を入れた甕を重ねて、竈で熱することによって穀物などを蒸すことができる。これは日本列島では従来には一般的なではなかった調理方法である。福岡市早良区の西新町遺跡では例外的に古墳時代前期に多数の出土例があるものの、いったん途絶えてしまう。古墳時代中期になってあらためて北部九州や岡山、近畿地方などで局所的に出現するのである。出現時は、格子・縄文・縦位平行タタキメを残すなど朝鮮半島の技法や

器形が保たれているが、次第に日本列島在来の技法で作られるようになり、器形も変化し、土師器の一器種として普及するようになる。

日本列島において出現したばかりの甑は、前述のように朝鮮半島の特徴をよく留めていることから、それを利用して故地を探ることができるという利点がある。

韓国では2000年以降に発掘調査の増加に伴って、甑の事例の増加と調査研究が進んだが、近年では全体を見渡した研究よりも、各地域における研究が主となりつつある。これはある意味やむを得ないことであり、故地の地域性を知りたいという日本の側で必要とされる課題である。よって、我々で的確に朝鮮半島の地域性を整理し、それを土台にして故地を探る必要がある。

日本列島で登場した頃の甑は、いずれも朝鮮半島からの影響ではあるものの、後述するように一律の故地を示さない。甑の研究を通じて、古墳時代において、具体的に朝鮮半島のどここの地域との交渉があったかということを知解する展望をもつことができる。文献史の研究でも朝鮮半島の具体的な地域との関わりがしばしば登場するが、考古学の方法で故地を検討することを通じて、独自の地域間交渉の構築が可能になると期待できる。

## 3. 研究の方法

まず、日本および韓国で刊行されている発掘調査報告書を基にしてデータベースを作成した。日本については、古墳時代中期を中心に情報収集を行い、後期についても朝鮮半島の特徴が残存している甑については留意した。韓国については、三国時代の甑の地域性を理解するために、原三国時代以降の甑の情報収集を行った。特に韓国ではホームページによるPDFファイルの報告書の公開が進んでいて、十分に活用することができた。

上記の情報収集を基盤として、要となる資料については日本および韓国において実物調査を行った。韓国での実物調査はほぼ全国をまんべんなく調査することができた。ここでの調査の知見を基にして、朝鮮半島的な技法や器形的特徴を把握することができ、日本の甑の実物調査に生かすことができた。

## 4. 研究成果

### 1) 朝鮮半島の甑の技法的特徴

まず、日本列島で登場する朝鮮半島系甑を定義するには、朝鮮半島の甑の特徴を示す必要がある。そのためには、のちに日本列島で展開する土師器の甑との対比を通じて、示すことが有効である。これまでの研究では、蒸気孔が多孔である、格子・縄文などのタタキメが残るといったことが指摘されてきたが、把手についても下記の点が有効な相違点であるということを見出すことができたので、以下に列記する。

- a) 把手の位置に沈線を施す。
- b) 把手の上面に切込を施す。

c) 把手の下面に刺突穴が残る(全羅道・忠清道・慶尚南道西部に多い)。

d) 把手を内側から挿入する。

以上の点は、ハケ調整で仕上げられる土師器の甑にはほとんど継承されないため、朝鮮半島系の初期の甑の認定には有効な要素と考える。

## 2) 朝鮮半島の地域性

各地域で刊行されている報告書を基に、実物調査を加えて朝鮮半島の地域性を把握することができた。3月に刊行した研究成果報告書(寺井2016『日本列島における出現期の甑の故地に関する基礎的研究』)では、朝鮮半島各地の紀元前後の原三国時代から三国時代後期の6世紀までの甑を整理したが、ここでは日本列島の甑に関わりのある4~5世紀の甑に絞って地域性を記すこととする。

まず、北朝鮮や中国東北地区に分布する高句麗の甑は鉢形の器形で、器高が30~40cm、口径約40cm、底径20~30cmと大振りで、朝鮮半島南部の甑の約2倍の大きさである。このような甑は高句麗の南進に伴い、京畿道や忠清北道でも出土しているが、日本列島の甑には影響を与えていない。

朝鮮半島中西部の京畿道では、丸底、抹角平底、平底の甑が存在する。丸底や抹角平底の甑は、外底面にまでタタキメを残し、蒸気孔は中央に円孔がひとつ、周囲に円孔や台形孔、三角形孔を複数個巡るものが多い。忠清道は平底が多いが、後述する全羅道と比べて、器高に対して、口径が大きいのが特徴である。

朝鮮半島南西部(全羅道・慶尚南道西部)では、直口縁で平底のものが圧倒的に多く、加えて、器高に対して、口径が小さめなのが特徴である。蒸気孔については、大まかには3~4世紀代は多孔、5世紀代は円孔が中央にひとつ、周囲に複数個巡り、5世紀後半から6世紀になると、頸部をもち、底部の外周に楕円形孔や三角形孔が巡るものが登場する。

朝鮮半島南東部(慶尚南道東部・慶尚北道)は、丸底の甑が圧倒的に多い。蒸気孔については、慶尚南道東部は小円孔が多数穿たれるものが多く、慶尚北道はヘラで切り込みを入れる細筋の蒸気孔を穿つものが多い。

以上の地域性は概ね4世紀後半から5世紀のものであるが、広域的な並行関係を十分に把握できていないため、日本列島との細かな対比をするためには課題として残る。

## 3) 日本列島内における故地の傾向

朝鮮半島の甑の特徴を基に日本列島を一般的に見た場合、百済・馬韓もしくは加耶西部に系譜が求められるものが圧倒的に多く、加耶東部や新羅の系譜のものはわずかであるといえる。

例えば、直口縁・平底で、円孔が中心にひとつと周囲に6~9個ある蒸気孔配置の甑を挙げてみると、日本列島では近畿地方の中

河内や陶邑周辺などで集中的に見られるが、北部九州の博多湾沿岸や内陸部の大分県日田市域でも事例がある。一方、朝鮮半島では忠清道・全羅道および慶尚南道西部に分布し、特に全羅南道に多く分布することから、故地はこの地域の可能性が高いと考える。なお、日本列島から距離的に近い慶尚南道東部ではなく、距離の離れたこの地域と接点を持つようになったのは、百済・馬韓との交渉において、鵝洲洞遺跡のある巨済島など南海岸を経由するなど、金官国が勢力をもつ洛東江下流域を通過しないルートが確保されたことが背景にあったと考える(寺井2014「馬韓と倭をつなぐ 巨済市鵝洲洞遺跡の検討を基に」)。

また、5世紀後半~6世紀前半になると、前代に多かった中河内で減少する一方で、葦屋北遺跡などの北河内で事例が増加する。また、陶邑では継続的に朝鮮半島系甑があるが、中心に円孔をひとつと、周囲に楕円形・三角形などの孔を巡らせるといった、以前はあまり見られなかった蒸気孔配置の甑が現れ、全羅南道で同様の蒸気孔の甑が出土していることから、継続的に接点があったことがわかる。

古代史の研究などでは倭王権が金官国とのつながりが強いといわれがちであるが、上記の通り甑では例は多くない。5世紀前半ごろの金官国の甑は、会峴洞消防道路区間内遺跡(慶尚南道金海市)のような丸底の甑が代表すると思われるが、これと同じような甑は近畿地方では八尾南遺跡(大阪府八尾市)や井戸井柄遺跡(奈良県御所市)くらいである。甑の系譜を基にして金官国と倭は没交渉であったとはいえるわけではないが、生活文化への影響は少なかったということであろうか。

## 4) 各遺跡・地域で見られる故地の構成

続いて、各遺跡・地域単位で甑の故地の比較を行ってみたい。

まず、5世紀前半の中河内の長原遺跡(大阪市)および八尾南遺跡、久宝寺遺跡(以上、八尾市)の甑については多くが全羅道もしくは慶尚南道西部のものと共通するが、忠清道や京畿道の甑に共通するものもある。一方で八尾南遺跡の丸底の甑は洛東江下流域のものである。全体的には全羅道を故地とするものが多いものの、少数ではありながら他地域の故地の甑も出土していることは、複数の出身の渡来人が一集落内で混在したことがうかがえる。

故地が多様な状況は5世紀前半の南郷遺跡群(奈良県御所市)でも見られる。ここでも多いのは全羅道もしくは慶尚南道西部に系譜が求められる甑であるが、洛東江下流域のものや京畿道に系譜が求められるものも含まれる。

5世紀後半かそれ以降の時期を主体とする葦屋北遺跡(四條畷市)など河内湖北岸の遺跡では、ほとんどが全羅南道の系譜のもの

で占められる。甑以外にも鳥足文タタキの陶質土器や竈焚口（U字形土製品）など百済・馬韓要素が色濃いことで知られている（この時期に馬韓の独自性がどこまで維持されていたのか判断しづらいため、引き続き「百済・馬韓」と表現している）。当遺跡を含めた北河内の渡来人は百済・馬韓にほぼ限定できるといえよう。

一方、岡山県の備中南部地域については、河内と違って一遺跡当たりの資料数が少ないため、地域でひとまとめにして述べるが、平底の甑がなく、丸底のものばかりであり、新羅・加耶東部系のもので占められるのが特徴である。菅生小学校裏山遺跡（倉敷市）では、細筋の蒸気孔をもつ典型的な新羅系の甑が出土している。

以上、遺跡・地域単位での故地の傾向について述べた。興味深いのは近畿と吉備で甑の故地の傾向が大きく異なるという点である。甑という文化要素のごく一面に過ぎないが、各地域で朝鮮半島の交渉対象者が異なることを反映しているのかもしれない。『日本書紀』で吉備が新羅と結びついて、反乱を起こそうとし、鎮圧された雄略紀の記述を思い起こさせる。こういった点はさらなる検討を加え、論証することが必要であるが、交渉相手の傾向の違いが現れるという点について、古墳時代中期の段階では対朝鮮半島交渉が中央で一元的に行われていたというよりも、依然各地域で独自のつながりがあったことを示しているのであろう。北部九州を含めると、日本列島各地域における多様な対朝鮮半島交渉のあり方が展望できる。

#### 5) 残された課題

本研究は3年間で日本および朝鮮半島の数多くの甑を観察する機会を得ることができた。ただ、朝鮮半島の甑の多様性を十分に整理できなかった点は多分にあるとともに、研究を進行する中で克服できなかった課題も多くある。最後にそれをいくつか列挙したい。

まず、ひとつめは朝鮮半島を広く対象にしたものの、細かな併行関係を把握することができなかった。これは朝鮮半島の土器編年を十分に習得できなかったためである。朝鮮半島および日本列島の広域の併行関係を確立することにより、より明確に時期ごとの地域間関係を把握することができるようになる。と考える。

もうひとつはのちの土師器として作られる甑に至るプロセスである。日本列島に伝わった後の甑は朝鮮半島的な技法で作られているとはいえ、いくらかの変容はしている。それが進むと土師器の甑となるのであるが、原点である朝鮮半島系甑を明確にすることによって、その後の展開と対比して、土師器化のプロセスの多様性を議論することができる。と考える。

3つめは甑以外の文化要素を含めた検討

である。日本の古墳文化は朝鮮半島各地の文化要素を複合的に導入しているのは確かである。甑で見えた故地がほかの文化要素でも言えるのであれば、朝鮮半島の特定の地域との交渉が行われていたということになる。一方、文化要素で複数の故地がある場合は、朝鮮半島の複数の地域と交渉を行っていたというだけではなく、それが導入の社会階層的な違いなのか、技術的な分野の選択的受容による違いであるのか、その他さまざまな背景となる点を考慮しなければならない。

これ以外にもさまざまな課題を念頭に置きつつ、今後とも本研究成果を発展させるようつとめたい。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計6件)

寺井誠、2016、須恵器甑に見られる朝鮮半島の要素、『大阪歴史博物館研究紀要』第14号、37-46

寺井誠、2016、4～5世紀の近畿地域を中心とした土器と渡来人集落、『日韓4～5世紀の土器・鉄器生産と集落』(「日韓交渉の考古学 - 古墳時代 - 」研究会発表資料) 103-118

寺井誠、2015、土師器甑を加工した甑 - 渡来文化受容の一事例 -、『大阪歴史博物館研究紀要』第13号、25-34

寺井誠、2014、西新町遺跡および朝鮮半島南部における網代状文タタキの系譜について、『韓式系土器研究』、9-24

寺井誠、2014、馬韓と倭をつなぐ 巨済市鵝洲洞遺跡の検討を基に、『東アジア古文化論攷』、375-392

寺井誠、2014、甑の観察点 - 長原遺跡で出土した古墳時代中期の資料の検討を基に -、『大阪歴史博物館研究紀要』第12号、37-46

〔学会発表〕(計3件)

寺井誠、甑から見た渡来人の故地、一般社団法人日本考古学協会第81回総会研究発表、帝京大学、2015年5月24日

寺井誠、当て具痕跡の地域性に関する研究展望と課題、都城制研究会、大阪歴史博物館、2014年6月21日

寺井誠、6・7世紀の北部九州の須恵器に見られる朝鮮半島の要素、第25回東アジア古代史・考古学研究会交流会、龍谷大学、2014年1月11日

〔図書〕(計1件)

寺井誠、2016、『日本列島における出現期の甑の故地に関する基礎的研究』科学研究費成果報告書、総100頁

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

寺井 誠 (TERAI, Makoto)

公益財団法人大阪市博物館協会(大阪文化財研究所、大阪歴史博物館、大阪市立美術館、大阪市立東洋陶磁美術館)・大阪歴史博物館・主任学芸員  
研究者番号：60344371